

No.68

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

木造釈迦如来坐像

鎌倉時代

像高 九十四センチ
武雄市 広福護国神寺蔵

広福護国神寺は、鎌倉時代仁治三年（一二四二）に武雄八代城主後藤直明の求めに応じて、聖一国師円爾弁円が開山したと伝える臨濟宗の古刹である。この像も、この由緒正しい広福護国神寺開山当初からの本尊として、代々祀られてきたと考えられる堂々たる鎌倉時代の仏像である。本体は檜材の寄木造りで、頭部には肉髻朱額には白毫と呼ばれる水晶がはめ込まれている。低くなだらかな肉髻、一粒一粒丁寧にしのぎ立たされた螺髮、峻厳さの中に優しい微笑をたたえたふくよかな顔、ゆつたりと広い肩、充分な厚味のある胸や腹、張りがある厚い膝、ゆつたりと通肩に覆う衣には衣紋線が自然に處理され、全体に素晴らしい構成を見せていく。真に鎌倉時代を代表するに恥じない傑品である。



目 次	○木造釈迦如来坐像	1 P
	○肥前の中世美術展開催要項	2 P
	○肥前の中世美術展案内	2~8 P

肥前の中世美術展開催要項

主 催	佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館		
会 場	佐賀県立博物館		
会 期	昭和60年2月2日(土)～3月10日(日)		
休 館 日	2月4日、12日、18日、25日、3月4日		
開館時間	9時～16時30分(入館は16時まで)		
観覧料	大人 500円 団体 400円	大・高生 250円 団体 150円	中・小生 150円 団体 100円 (団体は20名以上)

第1回講演会

演題	九州の中世美術と肥前
講師	九州大学文学部教授 平田寛氏
日時	昭和60年2月2日(土) 13時30分～
場所	佐賀県立美術館研修室
第2回講演会	
演題	請来作品を通して見た肥前の美術
講師	九州大学文学部助教授 菊竹淳一氏
日時	昭和60年2月16日(土) 13時30分～
場所	佐賀県立美術館研修室

肥前の中世

鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、全国に守護・地頭を任命し、在地の武士を支配しようとした。県内でも龍造寺氏の祖である南二郎季家や、後に高木氏を名乗る藤原季永などに地頭職を与えたが、支配力を強めていった。

しかし、13世紀の終りに元軍が北部九州に襲来し、鎌倉幕府は財政的に破綻し、群馬県の武士新田義貞らにより倒された。

その後、建武の新政や室町幕府の開幕により、全国が統一された時期もあったが、力をついた全国の武将たちが、互いに霸権を競い合う動乱の世の中になった。

県内でも、足利氏と結んだ大友氏により一度は平定されたが、その後、東部に勢いをもつ渋川氏及びそれを援ける大内氏と、佐賀以西に力をつけてきた少弐氏を核として争いが繰り返された。

こうした戦乱の中で、佐賀郡北部の地頭から成長した龍造寺隆信は大内氏と結び、後に鍋島直茂の協力もあって肥前の統一を進めた。

〈肥前と元寇〉

中国を統一したフビライは、今の北京である大都に都を定め、朝鮮半島を支配していた高麗を征服したあと、鎌倉幕府へも服属を求めてきた。

しかし、幕府がこれを断わったため、文永11年(1274)と弘安4年(1281)の2度にわたって、長崎・佐賀・福岡にまたがる九州北西部の広い地域に攻めてきた。これを元寇と呼んでいる。

この戦いでは、元軍の集団戦法や優れた兵器の前に、日本軍は大変苦戦をしたが、九州北西部に勢力を誇っていた松浦党を中心として、県内の武将たちが活躍し、大暴風雨の助けもあって、元軍を退けることができた。

その様子は、肥後国御家人竹崎季長が描かせた蒙古襲来絵図にある肥前国御家人白石六郎通泰の活躍の場面から窺い知ることができる。

資 料 名	時 代	所 �藏 者
海中より引上げた元時代の遺品	元	長崎県鷹島町 歴史民俗資料館

〈人々のくらし〉

中世の村は、寄合という村民会議と懇親という規律によって自立的に運営され、また、手工業者は座という同業組合を作り、商品の流通をはかるなど、人々はお互いに協力し、一致団結して合理的な生活を営んでいた。

しかし、動乱や飢饉により生活が苦しくなった人々は、借入金を帳消しにする徳政や税の軽減を求めて、各地で一揆を起こした。

こうした中世の民衆の生活を生き生きと物語るものとして、土鍋・は釜・皿・壺・椀・火鉢・灯籠・銅鏡・櫛・かんざしや、中国から輸入した陶磁器などが県内の遺跡からもたくさん出土している。

また、中世の終り頃には、北波多村の岸岳城を中心に、陶器が焼かれるようになった。



紙本着色蒙古襲来絵図(複製)
肥後国竹崎季長奮戦図(部分)



壺(海中引上げ品)
元時代
現高 22.0 cm 口径 9.1 cm
長崎県 鷹島町歴史民俗資料館
保管



櫛(三田川町下中村遺跡出土)
鎌倉時代
幅 8.2 cm 高 5.2 cm
佐賀県教育委員会保管

青磁碗	一口	宋	唐津市半田 常樂寺
飴釉流し叩き壺 飯洞甕窓	一口	室町	佐賀県立博物館
飴釉叩き壺 飯洞甕窓	一口	〃	
無地唐津猪口 飯洞甕上窓出土	一口	桃山	
青唐津猪口 飯洞甕下窓出土	一口	〃	
◎天正二十年銘 叩き黒唐津三耳付茶壺	一口		長崎県勝本町 聖母神社
斑唐津皮鯨茶碗 帆柱窓出土	一口	〃	
斑唐津猪口 岸岳皿屋窓出土	一口	〃	
青唐津猪口 道納屋窓窓出土	一口	〃	
無地唐津皿 小十郎窓出土	一口	〃	
飴釉小徳利 山瀬窓出土	一口	〃	
斑唐津皿 山瀬窓出土	一口	〃	

そのほか尾崎利田遺跡(神埼町)、下中村遺跡(三田川町)、靈仙寺遺跡(東脊振村)

など県内6遺跡から出土した日常使用の器類・木製品・古銭など約30点も展示。

中世の美

平氏の横暴に対する不満が高まり、治承4年(1180)5月、ついに源頼政が以仁王を奉じて挙兵し、源平の合戦が始まった。奈良では、僧兵も平氏に反抗し、12月、平重衡は東大寺・興福寺を焼き討ちした。

これによって、絵画・彫刻など、それまでの美術を代表する至宝の数々が一瞬にして灰燼に帰し、南都奈良は大打撃を受けた。

この両大寺の復興は直ちに開始された。翌養和元年には、俊乗坊重源が、造東大寺勸進職に補せられ、以来その生涯を東大寺の再興に尽くした。重源は三度に亘る入宋によって、宋風美術を充分に理解しており、その再興にあたっては、ふんだんに宋風を盛り込んだ。

そして、それは個人の精神性までをも、人間の理想的な姿に昇華する理想主義的写実主義へと高められていった。

また、中世には交通網の整備も進み、中央と地方との交流が頻繁に行われ、且つまた地方の自治意識も萌芽し、文化が地方へと伝播し、地方での文化活動も盛んになった。

写 経

金剛般若経や大般若経には、「仏教の教典を書写することには、無限の功德がある」と説かれている。また、法華経には「法華とは無限の力なり。」とあり、國家守護を祈願する経典として重要視された。

從って、飛鳥時代には既に写経の記録が見え、その後も朝廷や貴族、武将たちは、写経僧に仏典を書写させ、国家の安寧や一族の繁栄、武運の長久などを祈った。

しかし、鎌倉時代以降は、木版印刷された経典が、中国や朝鮮半島から輸入されたり、国内でも木版技術が進歩し、経典の印刷が盛んに行われるようになり、漸次仏典の書写は衰退していった。

◎紙本墨書き梵網經	一巻	南北朝	三田川町 東妙寺
◎版本般若心経	五十三枚	鎌倉	大和町 高城寺
◎版本宝慶印陀羅尼	一巻	〃	〃
紙本墨書き大般若經	一巻(第百巻)	南北朝	鎮西町 竜泉寺
〃	六百巻	〃	大和町 玉林寺
〃	〃	〃	長崎県鹿島町 住吉神社
〃	〃	南北朝	佐賀市 大興寺
〃	〃	室町	太良町 観世音寺
〃	〃	〃	伊万里市 本覚寺
版本大般若經	六百巻	〃	小城町 三岳寺
〃	〃	〃	三根町 光淨寺
末代念仏授手印	一巻	鎌倉	佐賀市 大覺寺



斑唐津皮鯨茶碗

桃山時代

高 6.9 cm 口径 12.5 cm



木造菩薩延命菩薩騎像像

鎌倉時代 正中3年(1326)

像高 71.1 cm

佐賀市 竜田寺蔵



版本般若心経

(木造円鑑禪師坐像像内納入品)

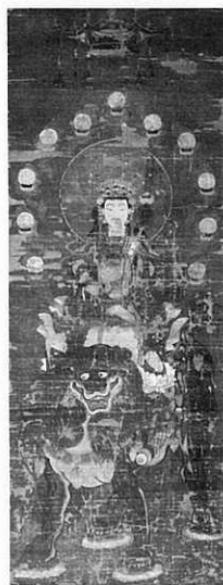
鎌倉時代 正安2年(1300)

縦 13.4 cm 横 16.6 cm

大和町 高城寺蔵



黒漆塗萌黄糸威五枚胴具足
室町時代後期～桃山時代
佐賀県立博物館蔵



絹本着色八字文殊菩薩騎獅像
南北朝時代
縦 91.3 cm 横 36.5 cm
鹿島市 誕生院蔵

〈甲冑・刀剣〉

中世の甲冑は、将士の間に大鎧が着用され、簡便な胴丸も後では使用された。また、南北朝時代からは腹巻、腹当が歩卒の間に用いられた。鉄砲伝来以降は、鉄胴を主とする当世具足が普及した。肥前に伝わる甲冑は、鎌倉の雪の下で造りだしたといわれる雪の下胴（五枚胴具足）が主である。これは江戸時代、佐賀城下で製作された肥前具足の祖である。

肥前の中世期の刀鍛冶は殆んど知られていないが、神埼、上峰、坊所、川上、塚崎（武雄）、塙田、浜崎、諫早、大村、平戸等に豊後高田系、筑前の左文字一族、金剛兵衛、肥後の延寿系、薩摩の波平系等の流れをくむ刀工の交流がみられ、現在、古刀として伝承されているものは、主に、鍋島家や古社寺に奉納されたものである。

一 甲 冴 一

紺糸威桶側二枚胴具足	桃 山	佐賀県立博物館
黒漆塗雪下胴具足	〃	〃
黒漆塗紺糸威五枚胴具足	室 叡	〃
黒漆塗萌黄糸威五枚胴具足	桃 山	〃

一 刀 剣 一

◎太刀 銘 朱銘 国行 衛府太刀 銘 無銘	鎌倉	
◎太刀 銘 朱銘 来国光	〃	
◎太刀 銘 無銘（伝行光）	〃	
◎太刀 銘 備中國住人吉次 太刀 銘 無銘（伝長氏）	南北朝	佐賀県立博物館 呼子町 田島神社
短刀 銘 (表)備州長船重真 (裏)延文三年二月日	〃	佐賀県立博物館
◎長卷 銘 正平十□肥州末貞	〃	
◎薙刀 銘 (表)備州長船政光 (裏)貞治元年十二月日	〃	
◎太刀 銘 康（以下不明、伝康光） 太刀 銘 備前国住則広	室 叡	佐賀市 与賀神社
脇差 銘 (表)備州長船盛光 (裏)応永廿八年八月日	〃	佐賀県立博物館
太刀 銘 (表)元成(裏)真屋	〃	
太刀 銘 南都金房隼人兼正真作 槍 銘 南部住藤原朝臣金房兵衛尉政次	〃	佐賀市 勝宿神社
槍 銘 (表)肥州神崎住小河兵部丞源盛吉作 (裏)八月日	〃	
槍 銘 相州住周廣	〃	佐賀県立博物館

〈絵 画〉

鎌倉時代に、水墨画が中国から輸入された。水墨画は、墨の濃淡と空白で全てを表現するという特徴を持ち、禅宗の隆盛とともに全国へと波及した。

また、中世には肖像画の一様式である武将などを描いた似絵や、僧侶を描いた頂相が、当時の写実趣味と相俟って流行した。

他にも元寇で活躍した熊本の御家人竹崎季長を描いた蒙古襲来絵図などの戦記絵巻や、菅原道真の生前や死後を描いた北野天神縁起などの説話絵巻といった史実に基づく絵物も新しく隆盛した。

なお、一方では仏画や、やまと絵など保守性の強い分野では、前代以来の伝統的な絵画も描かれた。

〈仏 教 絵 画〉

「密教の奥義は深く、画像の助けをかりなければ、言葉を通してだけでは窺い

知ることができない。」とされ、修法道場には仏教絵画を本尊として安置し、その前で修業のために瞑想し、国家人民のために加持祈禱を行った。

中世の仏画は、宋風の影響を受け、全体に写実性を帯びるようになり、表現の面でも、優美繊細な貴族趣味から、力強さをもつた色感の武士好みのものへとかわった。描線も、太さの均一な鉄線描から肥瘦のある線が多用されるようになつた。

懸絹本着色画面曼荼羅図	一対	鎌倉	多久市 妙覚寺
板絵金剛界種字曼荼羅	一面	南北朝	三田川町 石塔院
懸絹本着色八字文殊菩薩騎獅像	一幅	〃	鹿島市 誕生院
絹本着色愛染明王騎獅像	一幅	室町	大和町 実相院
○絹本着色十六羅漢像	十六幅	鎌倉	神奈川県立博物館
〃	〃	室町	武雄市 広福護国禅寺
絹本着色十王図	十幅	〃	大和町 万寿寺
絹本着色聖一國師像	一幅	〃	武雄市 広福護国禅寺
懸紙本着色福満寺古図	一幅	〃	佐賀市 福満寺
版本大仏頂万行首楞嚴神咒図	一幅	〃	武雄市 広福護国禅寺

〈水墨画〉

室町時代15世紀の画僧雪舟は、我国における水墨画完成の第一人者であり、活動の拠点が山口にあったことから、西日本とくに、北部九州との結びつきが強いといわれる。

等禅は、肥前松浦の出身で雪舟に師事し、ある時期京都東福寺にいたと思われ、聖一國師にゆかりのある禅宗寺院に作品が残っている。等禅の作品は、そのほか数例が確認され、雪舟画風のその後の広がりをよく示すものである。

紙本墨画聖一國師像 等禅筆	一幅	室町	福岡県福岡市 承天寺
紙本着色維摩居士図 即非如一贊 等禅筆	一幅	〃	〃
紙本墨画淡彩文殊図 等禅筆	一幅	〃	東京芸術大学芸術資料館
紙本着色文殊・花鳥図 等禅筆	三幅	〃	東京国立博物館
紙本墨画蓮に鷺図 等禅筆	二幅	〃	大和町 万寿寺
紙本着色梅に鸚鵡図 伝等禅筆	一幅	〃	大和町 万寿寺

〈彫刻〉

鎌倉時代には、武士の台頭が顕著となり、戦乱や飢饉の頻発による生活の苦しみからにじみ出た喜怒哀楽をともにしてくれるような人間的な彫刻が好まれるようになる。

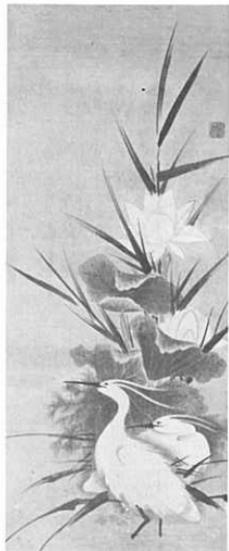
殊に、治承4年(1180)に起こった平重衡による南都焼討ちからの東大寺・興福寺の復興を契機として、運慶・快慶に代表されるように、写実的でありながらも人間の理想的な姿を追究した鎌倉様式が、一度に開花した。

この流れは、仏像を作ることを重要視しない真宗や禅宗の盛行により、その活動の場をせばめながらも、慶派を中心として、藤原様式とともにその後長く伝えられていった。

〈神道彫刻〉

元来神道では、八百万神という言葉に象徴されるように、神は空中に実体なく普く存在し、靈木や靈石などを「神のよりしろ」として臨下するとされているが、次第に神殿設備が整えられ、礼拝の対象としての神像が制作されるようになる。

しかし、神像それ自身には、その造形的価値の面からは、決して高いとは言えないものも含まれている。これは、神像には、神殿の奥深くに安置され、礼拝者の目に触れることなく神秘の雰囲気を醸し出すことを期待したためだと思われる。



紙本墨画蓮に鷺図 等禅筆

室町時代後期
縦 105.5 cm 横 43.0 cm
大和町 万寿寺蔵



木造神像

室町時代 永禄4年(1561)
像高 33.5 cm
鹿島市 天満宮



木造面

桃山時代 天正 10 年 (1582)
面長 19.9 cm



木造地蔵菩薩半跏像

鎌倉時代
像高 124.3 cm
小城町 円明寺蔵



自然石彫像板碑

室町時代
像高 55.0 cm
白石町 法泉寺蔵

木造男神像	一軀	南北朝	相知町	三光神社
木造神像	六十七軀	室町	佐賀市	堀江神社
木造男女神像	一对	〃	鹿島市	中尾天満宮
木造山王神像	一軀	〃	大和町	実相院
木造男神像	一軀	〃	川副町	志賀神社
木造隨神像	一对	〃	塙田町	味島神社
〃	〃	〃	佐賀市	本覚院
木造狛犬	一对	鎌倉	嬉野町	両岩神社
〃	〃	室町	塙田町	味嶋神社
〃	〃	〃	鹿島市	中尾天満宮
石造狛犬	一对	〃	相知町	熊野神社
木造面	二面	鎌倉	呼子町	田島神社
〃	〃	桃山		

<仏教彫刻>

県内に残る仏教彫刻は、奈良・京都など中央系の仏師によるものと、在地系の仏師の造仏によるものとに大別することができる。

殊に中世には、地方の自治意識が高まる一方、中央の造仏活動が停滞し、在地系の仏師による造仏活動が盛んになった。

これらの仏像は、多くが一本の木から作られた丸彫や一本造で、金箔や彩色を施さない素木造である。

また、造仏の注文は貴族や有力武将によるものから、一般の人達が寄付を募つて行なうことが多くなった。

◎木造釈迦如来坐像	一軀	鎌倉	三田川町	東妙寺
〃	〃	〃	武雄市	広福護国禪寺
木造阿弥陀如来坐像	一軀	〃	鳥栖市	西清寺
〃	〃	室町	鹿島市	興善院
〃	一軀	南北朝	白石町	妙楽寺
木造阿弥陀如来立像	一軀	鎌倉	小城町	見明寺
〃	〃	室町	山内町	東光寺
〃	〃	桃山	神埼町	地蔵院
木造薬師如来坐像	一軀	室町	三日月町	岡本薬師堂
〃	〃	〃	伊万里市	東照支部
木造聖觀音坐像	一軀	南北朝	相知町	妙音寺
木造聖觀音立像	一軀	室町	有明町	座主坊
木造十一面觀音立像	一軀	〃	三田川町	石塔院
◎木造如意輪觀音坐像	一軀	鎌倉	相知町	梶山觀音堂
◎木造普賢延命菩薩騎象像	一軀	〃	佐賀市	竜田寺
◎木造地蔵菩薩半跏像	一軀	〃	小城町	円明寺
木造地蔵菩薩半跏像及び両脇侍像	三軀	室町	太良町	大川内地蔵院
木造地蔵菩薩立像	一軀	〃	塙田町	常在寺
〃	〃	桃山	川副町	和崎地蔵堂
木造菩薩形立像	一軀	室町	鹿島市	信福寺
◎木造持国天立像	一軀	鎌倉	武雄市	広福護国禪寺
◎木造增長天立像	一軀	〃		
◎木造円鑑禪師坐像	一軀	〃	大和町	高城寺
木造如來形坐像	三面	桃山	山内町	定林寺
自然石彫像板碑	一基	室町	白石町	法泉寺

〈金工〉

肥前の中世の金工では、健福寺（大和町）の銅鐘、次いで水上の懸仏（大和町）が古く、つづいて肥前鐘、定光寺の雲版（壱岐）、天山神社の青銅鉢（嚴木町）、東楽寺の鰐口（有明町）、実相院の法具（大和町）、などがあげられる。肥前鐘を除いて製作場所や由来等は判明していないものが多いが、いずれも独自な優美さを持ち、資料的価値の高い作品である。

肥前鐘は、鎌倉後期から南北朝にかけて上松浦山下庄で鋳造された銅鐘で、竜頭、乳、駒の爪形などにその特色がみられる。この鐘にみられる紐や撞座の形式は、後世の雲版、鰐口に影響し、特に、江戸期に佐賀城下で鋳造された肥前新鐘や、肥前鰐口の紋様にみられる点は、特筆されるものである。

◎建久七年銅鐘	一口	鎌倉	大和町 健福寺
◎嘉元二年銅鐘	一口	"	島根県松江市 宝照院
◎觀応三年銅鐘	一口	南北朝	福岡県福岡市 柳田神社
◎永和二年銅鐘	一口	"	相和町 医王寺
◎文祿三年後銅鐘	一口	"	福岡県添田町 芙山神宮
◎銅製鰐口	一口	室町	長崎県勝本町 金蔵寺
銅製鰐口	一口	"	福岡県星野村 小野神社
◎銅製鰐口	一口	"	有明町 東楽寺
◎銅製雲版	一面	"	長崎県芦辺町 定光寺
◎銅製雲版	一面	"	福岡県福岡市 聖福寺
◎戒体箱	一口	"	大和町 実相院
◎居箱・香爐箱	三口	"	"
◎如意	一柄	"	"
◎青銅鉢	十一口	"	嚴木町 天山神社
◎銅製花瓶	一対	桃山	福岡県太宰府市 太宰府天満宮
五鉛杵	一口	鎌倉	山内町 定林寺
"	"	"	"
◎水上懸仏	一面	鎌倉	大和町 水上区
懸仏	一軸	室町	唐津市 浄泰寺
"	"	"	山内町 悅地院
御正体	一面	"	唐津市 常楽寺

請來された美術

佐賀県は、対馬・壱岐を介して中国大陆と接しており、絵画・彫刻・写經・陶磁器など、広汎にわたる文物が請來された。

殊に、朝鮮半島から請來された文物の中には、美術的に大変価値の高いものがある。

朝鮮半島は、統一新羅時代に石窟庵に代表されるように、仏教彫刻の黄金時代を迎える。その後期には仏教が地方へ広く普及する半面、造形的には漸次衰退の憂き目にあった。高麗時代に入り、仏教が国王によって保護されるようになると、再び仏教美術の優品が生み出されるようになった。

中でも、唐津市鏡神社所蔵の絹本着色楊柳観音像は、縦4m横2m半にも及ぶ大幅でありながら、その隅々に至るまで妙麗に彩られた文様が施された繊細優美なもので、真に高麗美術を代表すると言える。

彫刻の分野でも、鹿島市普明寺蔵の銅造菩薩形坐像の柔和な微笑を浮かべた面長の顔や、細くしなやかな体躯、全身にまとわれたうすい衣や装飾性豊かな瓊塔には、高麗時代の芸術性の豊かさが偲ばれる。

なお、鳥栖市万歳寺の絹本着色見心来復禪師円像は、中国元時代至正25年(1365)に描かれたもので、その写実性の高い描写力は、元時代を代表するものである。



觀応三年銅鐘
南北朝時代 觀応3年(1352)
高 93.9 cm 口絆 53.6 cm
福岡県 柳田神社蔵



絹本着色見心来復禪師円像
元時代 至正25年(1365)
縦 94.5 cm 横 44.8 cm
鳥栖市 万歳寺蔵

一絵 画一

◎絹本着色楊柳觀音像	一幅	高麗	唐津市 鏡神社
絹本着色阿弥陀八大菩薩像	一幅	高麗	武雄市 広福護国禪寺
絹本着色积迦三尊及び比丘像	一幅	李朝	//
絹本墨画淡彩善財童子歷參図	一幅	//	//
絹本墨画淡彩楊柳觀音像	一幅	//	//
絹本着色見心來復禪師円像	一幅	元	鳥栖市 万歳寺



絹本着色楊柳觀音像

高麗時代 至大3年(1310)

縦419.5cm 橫254.2cm

唐津市 鏡神社蔵

一彫 刻一

銅造如来形立像	一軀	新羅	唐津市 浄泰寺
銅造誕生仏	一軀	高麗	鳥栖市 万歳寺
◎銅造如来形坐像	一軀	//	唐津市 山田菜堂堂
◎銅造菩薩形坐像	一軀	//	長崎県郷ノ浦町 金谷寺
//		//	鹿島市 普明寺
銅造普賢菩薩騎像	一軀	明	鳥栖市 安生寺
銅造菩薩形坐像	一軀	//	//
銅造菩薩形半跏像	一軀	//	//
銅造菩薩形坐像	一軀	//	西有田町 原明区
銅造比丘形立像	一軀	//	唐津市 浄泰寺
銅造倚像	一軀	//	

一写 経一

紺紙金字妙法蓮華經	七巻	高麗	唐津市 浄泰寺
白紙金字金剛般若波羅密經	一巻	高麗	佐賀市 慶聞寺

◎重要文化財 ○重要美術品 恽県指定重要文化財



紺紙金字妙法蓮華經

高麗時代 至元6年(1340)

縦31.9cm 橫(一折)10.9cm

佐賀県立博物館保管



銅造菩薩形坐像

高麗時代

像高 65.8cm

鹿島市 普明寺蔵

博物館・美術館報 第68号
発行年月日 昭和60年2月1日
編集 大塚正道
発行 佐賀市城内1丁目15番23号
佐賀県立博物館
印刷 佐賀県立博物館
印刷